

冬の花火

———三幕

太宰治

青空文庫

人物。

数枝かずえ

二十九歳

睦子むつこ

数枝の娘、六歳。

伝兵衛でんべえ

数枝の父、五十四歳。

あさ

伝兵衛の後妻、数枝の継母、四十五歳。

金谷清蔵かなやせいぞう

村の人、三十四歳。

その他

栄一（伝兵衛とあさの子、未帰還）

島田哲郎（睦子の実父、未帰還）

いずれも登場せず。

所。

津軽地方の或る部落。

時。

昭和二十一年一月末頃より二月にかけて。

第一幕

舞台は、伝兵衛宅の茶の間。多少内福らしき地主の家の調度。奥に二階へ通ずる階段が見える。上手は台所、下手は玄関の気持。

幕あくと、伝兵衛と数枝、部屋の片隅かたすみのストーヴにあたって
いる。

二人、黙っている。柱時計が三時を打つ。気まずい雰囲気。突然、数枝が低い異様な笑声を発する。

伝兵衛、顔を挙げて数枝を見る。

数枝、何も言わず、笑いをやめて、てれかくしみたいに、ストーヴの傍の木箱から薪まきを取り出し、二、三本ストーヴにくべる。

(数枝) (両手の爪を見ながら、ひとりごとのように) 負けた、負けたと言うけれども、あたしは、そうじゃないと思うわ。

ほろんだのよ。滅亡しちやったのよ。日本の国すみの隅から隅まで占領されて、あたしたちは、ひとり残らず捕虜ほりよなのに、それをまあ、恥かしいとも思わずに、田舎いなかの人たちったら、馬鹿だわねえ、いままでどおりの生活がいつまでも続くとても

思っているのかしら、相変らず、よそのひとの悪わるくち口ばかり
言いながら、寝て起きて食べて、ひとを見たら泥棒と思つて、
（また低く異様に笑う）まあいったい何のために生きている
のでしよう。まったく、不思議だわ。

（伝兵衛）（煙草を吸い）それはまあ、どうでもいいが、お前に
いま、亭主、というのか色男というのか、そんなのがあると
いうのは、事実だな？

（数枝）（不機嫌になり）いいじゃあないの、そんな事は。（舌
打ちをする）なんにも言わなけあよかった。

（伝兵衛） お前が言わなくなつて、どこからともなくおれの耳
にはいつて来る。

(数枝) もったいぶらなくたって、わかっているわよ。お母さ

んでしよう？

(伝兵衛) (軽く狼ろうばい狽いの気味) いや。

(数枝) (小声で早口に) そうよ、それにきまっているわ。お母さんはまた、どうして勘附いたのかしら。ばかなお母さん。

間。

(伝兵衛) あさから聞いた。しかし、あさは、決して、何も、

……。

(数枝) (それを相手にせず、急に態度をかえて) お母さんは、

どこへ行つたの？

(伝兵衛) 鱈たらを買いに行かなくちやならんとか言つていたが。

(数枝) 睦子をおぶつて？

(伝兵衛) そうだろう。

(数枝) 重いでしょうにねえ。あの子は、へんに重いだよ。いやにおばあちゃんになつてしまつて、いい氣になつてへばりついでる。

(伝兵衛) お前の小さい時によく似ている。(改まつた顔つきになり、強い語調で) あさは、あの子をほしいと言つているのだが。

(数枝) (顔をそむけ) ばかな。

(伝兵衛) いや、まじめに言ってる。まあ、聞け。あさが、ゆ

うべ、(かすかに苦笑を浮べて)おれにまじめに相談した事だ。栄一の事はもうあきらめられている。戦地からのたよりが無くなつてから、もう三年経^たつ。あれの部隊が南方の何とやらいう小さい島を守りに行ったという事だけは、わかっているが、栄一はいま無事かどうか、さっぱりわからぬ。あきらめた、とあさは言っている。ちょうどいい具合にお前が睦子を連れて東京から帰つて来た。しかし、お前にはもう内緒の男があるらしい。またすぐ東京へ行ってしまうつもりだろう。まあ、黙つて聞けよ。それはお前の勝手だ。好きなようにしたらいいだろう。しかし、睦子は置いて行ってもらえまいか。

(数枝) (また異様な笑声を発して) 本気でおっしやったの？

そんな馬鹿な事を、まあ、お母さんもどうかしてるわ。もうろくしたんじゃない？ ばかばかしい。

(伝兵衛) もうろくしたのかも知れない。おれだって、ばかばかしい話だと思った。しかし、あれはまじめにそんな事を考えているようだ。お前がこれから、いまのその、亭主だか色男だかのところへ引上げて行くにしても、睦子がついているんでは、この後、その男との間に面白くない事が起るかも知れない。お前もまだ若いのだから、これから子供はいくらでも出来るだろう。とにかく睦子は、この家に置いて行ってもraithたい、と言うのだが、あれとしては、いろいろ考えた末

の名案のつもりなのだろう。お前のためにも、それが一ばんいいと考えているらしい。

(数枝) 余計なお世話だわ。

(伝兵衛) そうだ。余計なお世話にちがいない。しかし、お前のように、ただもう、あさを馬鹿にして、……。

(数枝) (皆まで聞かず) そんな事、そんな事ないわ。ねえ、お父さん。生みの親より育ての親、と言うでしょう？ あたし

の生みの母は、あたしが今の睦子よりもっと小さい時になくなつて、それからずっといまのお母さんに育てられて来たのですもの、あとでひとから、あれはお前のままはは継母で、弟の栄一とは腹ちがいだなんて聞かされてもあたしは平気だった

わ。継母だって何だってあたしのお母さんに違いないのだし、腹ちがいでも栄一はやっぱりあたしと仲のよい弟だし、そんな事はちつともなんにも気にならなかつた。だけど、あたしが女学校へ行くようになってから、何だか時々ふつと淋さびしく思うようになったの。だって、お母さんは、あんまりよすぎるんだもの。一つも欠点が無いんだもの。あたしがどんなわがままを言っても、また、いけない事をして、お母さんは一度もお叱しかりにならず、いつも笑ってあたしを猫可愛がりに可愛がっていらつしやる。あんな優しいお母さんてないわよ。優しすぎるわ、よすぎるわ。いつかあたしが、足の親指の爪をはがした時、お母さんは顔を真ま蒼さおにして、あたしの指に

繻帯ほふたいして下さりながら、めそめそお泣きになって、あたし、いやらしいと思つたわ。また、いつだったか、あたしはお母さんに、お母さんはでも本当は、あたしよりも栄一のほうが可愛いのでしょうか？ っってお聞きしたら、まあ、上手に答えるじゃないの、お母さんはね、その時あたしにこう言つたの。時たまはなあ、だつて。あんまり正直らしく、そうして、優しいみたいで、にくらしくなつちやつたわ。栄一にばかり、ひどく難儀な用事を言いつけて、あたしには拭ふき掃除そうじさえろくにさせてくれないのだもの。だからあたしも意地いぢになつて、うんと我わが儘ままをしようと考かんえたのよ。思おもいつきりお行儀を悪くして、いけない事ばかりしてやろうという氣になつちやつ

たのよ。だけど、あたしはお母さんをきらいじゃないのよ。大好きなのよ。好きで好きで武者振りつきたいくらいだったわ。お母さんだって、あたしをしんから可愛かったらしいのね。あんまり可愛くて、あたしにいつも綺麗なきれい着物を着せて置いて、水仕事も何もさせたくなかったらしいのね。それはわかるわ。本当はね、（突然あははと異様に笑う）お母さんとあたしとは同性愛みたいだったのよ。だから、いやらしくって、にくらしくって、そうして、なんだか淋しくて、思いきり我儘して悪い事をして、そうしてお母さんと大喧嘩おおげんかをしたくて仕様が無かったの。

（伝兵衛）（顔をしかめて）三十ちかくにもなって、まだそんな

馬鹿な事ばかり言っている。も少し、まともな話をしないか。

(数枝) (平然と) お父さんは鈍感だから何もわからないのよ。

お父さんみたいなのを、好人物、というんじゃないかしら。まるでもう無神経なのだから。(語調をかえて) でも、お母さんは昔は綺麗だったなあ。あたし、東京で十年ちかく暮して、いろんな女優やら御令嬢やらを見たけれども、うちのお母さんほど綺麗なひとを見た事が無い。あたしは昔、お母さんと二人でお風呂へはいる時、まあどんなに嬉しかったか、どんなに恥かしかったか、いま思っても胸がどきどきするくらい。

(伝兵衛) おれの前でそんなくだらない話は、するな。それで、

どうなんだ？ 睦子を置いて行く気か？

(数枝) (呆れた顔して) ま、お父さんまでそんな馬鹿げた、：

∴。

(伝兵衛) しかし、男があるんだろう？

(数枝) (顔をしかめ、うつむいて) ほかに聞き方が無いの？

(伝兵衛) どんな聞き方をしたって同じじゃないか。(こみ上

げて来る怒りを抑えている態で) お前も、しかし、馬鹿な事をしたものだ。そう思わないか。

(数枝) (顔を挙げ、冷然と父の顔を見守り無言)

(伝兵衛) 小さい時から我儘で仕様がなかったけれども、しか

し、こんな馬鹿な奴とは思わなかった。お前のためには、あ

さも、どれだけ苦勞して来たかわからないのだ。お前が弘ひろさ前の女ま学校を卒業して、東京の専門学校に行くと言ひ出した時にも、おれは何としても反対で、気分が悪くなつて寝込んでしまったが、あさはおれの寝ている枕まくらもと元もとに坐つたきりで、一生のたのみだから数枝を数枝の行きたいという学校に行かせてやつてくれと頼んで泣き、おれも我がを折つて承知した。お前は、当り前だというような顔で東京へ行き、それつきり歸つて来ない。小説家だか先生だか何だか知らないが、あの島田とくつついて学校を勝手にやめて、その時からもうおれはお前を死んだものとして諦あきらめた。しかし、あさは一ひとこ言ともお前の悪口を言わず、おれに隠して、こつそりあれの

へそくりをお前に送り続けていたようだ。あさは、自分の着物売ってまでもお前にお金を送っていたのだよ。睦子が生れてそれから間もなく、島田が出征して、それでもお前は、洋裁だか何だかやってひとりで暮せると言つて、島田の親元のほうへも行かず、いや、行こうと思つても、島田もなかなかの親不孝者らしいから親元とうまく折合いがつかなくて、いまさら女房子供を自分の親元にあずかしてもらうなんて事は出来なかつたようで、それならば、おれたちのほうに泣き込んで来るのかと思つていたら、そうでもない。おれはもう、お前の顔を二度とふたたび見たくなかつたので知らん振りをしていたが、あさは再三お前に、島田の留守中はこっちに

るようと手紙を出した様子だった。それなのに、お前はひどく威張り返って、洋裁の仕事がいそがしくてとても田舎へなんか行かれぬなどという返事をよこして、どんな暮しをしていたものやら、そろそろ東京では食料が不自由になつているといふ噂うわさを聞いてあさは、ほとんど毎日のように小包を作つてお前たちに食べ物を送つてやつた。お前はそれを当り前みたいに平気で受取つて、ろくに礼状も寄こさなかつたようだが、しかし、あさはあれを送るのに、どんな苦勞をしていたかお前には、わかるまい。一日でも早く着くようにと、必ず鉄道便で送つて、そのためにあさは、いつも浪岡の駅まで歩いて行つたのだ。浪岡の駅まではここから一里ちかくもあ

るのだよ。冬の吹雪ふぶきの中も歩いて行つた。六時の上のほり一番の
汽車に間に合うようと、暗いうちに起きて駅へ行く事もあ
つた。あれはもう、朝起きてから夜眠るまで、お前たちの事
ばかり考えて暮していたのだ。お前ほど仕合せな奴は無い。
東京で罹災りさいしたと言つて、何の前触れも無く、にやにや笑つ
てこの家へやつて来て、よくもまあ恥かしくもなく、のこの
こ帰つて来られたものだとおれは呆れてお前たちには口もき
きたくない氣持だったが、しかし、お前もいまはおれの娘で
はないんだし、島田という出征軍人の奥様なのだから、足蹴あしげ
にして追い出すわけにもゆかず、まあ、赤の他人の罹災者を
おあずかり申すつもりで、お前たちを黙つてこの家に置いて

やる事にしたのだ。つけ上つては、いけない。おれには、お前たちの世話をしてやる義務もないし、お前だつてこの家で我儘を言う権利などは持っていない筈だ。はず

(数枝) (うつむいて、けれども、はつきりと) 島田は死んだよ
うです。

(伝兵衛) そうかも知れない。しかし、まだ遺骨が来ない。お葬とむらいも、すんでいない。馬鹿な奴だ、お前は。いったい、いまの亭主だか何だか、それはどんな男なんだ。

(数枝) お母さんにお聞きになつたらいいでしょう。なんでも知っていらつしやるらしいから。

(伝兵衛) (無意識にこぶしを握り) まだそんな馬鹿な事を言う

のか。あさは何も知ってはいない。ただお前が、こつそり誰かと文通しているらしいという事、たまにはお金も送られて来る様子だし、睦子が時々、東京のオジちゃんがどうのこうのと言うし、それは、あさでなくたって勘附くわけだ。

(数枝) でも、お父さんは知らなかったのでしょうか？

(伝兵衛) (苦しそうに) 夢にもそんな事を思う道理が無いじゃないか。(溜息^{ためいき}をついて) お前はまあ、これからさき、どこまで墮落して行くつもりなのだ。

(数枝) (静かに) この家に置いていただけなら、睦子を連れて東京へ帰るつもりでいます。春までこちらに置いていただき、そうしてその間に、鈴木がむこうで家を見つけるとい

う事になっていたのですけど。

(伝兵衛) スズキというのか、その男は。

(数枝) (おとなしく) そうです。

(伝兵衛) (いかめしく) その男と一緒にになってから何年になる。

(数枝) (無言)

(伝兵衛) 聞かないほうがよいのか? よし、たいていわかった。(興奮を抑えつつ静かに、しかし、音声が変わっている)

出て行け。いますぐ出て行け。どこへでもかまわない。出て行ってくれ。睦子を置いて、いますぐその男のところに行つてしまえ!

(数枝) (顔を挙げて) お父さん、あなたは、あたしが東京でど

んな苦勞をして来たか、知っていますか。

玄関のあく音。

(継母のあさの声) お利口だったねえ、お利口だったねえ。寒くつても、ちつとも泣かなかつたんだものねえ。

(睦子の声) そうしてそれから、睦子なんか、うんと役に立つたね？

(あさの声) そうとも、そうとも。おばあちゃんの財布を持ってきて落さなかつたんだものねえ。ずいぶん役に立った。とつても役に立った。

(睦子の声) だからこんども、おつかいに連れて行くのね？

(あさの声) 連れて行くとも、連れて行くとも。さあ、あつたしましよう。

しもて
下手の障子をあけて、あさ、睦子登場。睦子はすぐ数枝のほうに走って行き、数枝の膝ひざの上に抱かれる。

(数枝) (あさに向い、笑いながら) 重かったでしよう？

(あさ) (買って来た魚のはいっている籠かごやら、角巻かくまき——津軽

地方に於ける外出用の毛布——やらを上手かみての台所のほうに運びながら) ああ、重かったとも何とも、石の地蔵様を背負つ

て歩いてるみたいだったよ。(上手の障子をあけて、台所に降りて障子をしめ、あとは声のみ) このごろはどうして、なかなかわるぢえ悪智慧が附いてね、おんりして歩かないかって言えば、急に眠ったふりなんかしてさ、いやな子だよ。

(数枝) (睦子の手に握られてある一束ひとつたばの線香花火に氣附いて) おや、これは何? どうしたの?

(睦子) これは、おもちゃ玩具です。

(数枝) 玩具? (笑って) へんな玩具ねえ。おばあちゃんに買っていたいだいたの?

(睦子) (うなづく)

(あさ) (台所にて何かごとごと仕事をしていながら、やはり障

子の蔭から声のみ）いまの子供は可哀かわいそうだよ。玩具らしいものを一つも売っていないんだものねえ。日の丸の小さい旗がほしいって睦子が言うんだけれどもね、ひやりとしたよ。そう言われて見ると、あの旗の玩具は、戦争中はどこの小間物屋にでも、必ずあったものなのに、このごろは影を消してしまったようだね。せめて子供にだけでも、あの旗を持たせて遊ばせてやりたいと思うんだけど、やっぱりだめなのかねえ。睦子にそこんところを何と説明してやったらいいか、おばあちゃんも困ってしまった。（ひくく笑う）線香花火だけは、たくさんお店にあつてね。どういうわけかしら。どうもこのごろのお店には、季節はずれの妙な品物ばかり並んでい

るよ。麦わら帽子だの、蠅はえたたきだの、笑わせるじゃないか、あんなものでも買うひとがあるんだろうねえ。いまだき蠅たたきなんかを買ってどうするのだろう。

(数枝) (笑って) 蠅たたきだって、羽子板のかわりくらいにはなるかも知れないわ。こんな線香花火なんかよりは、子供にはいい玩具かもわからない。(睦子の手から線香花火を取っていじりながら) 冬の花火なんて、何だか気味きびが悪いわねえ。さつき睦子が持っているのをちらと見た時、なぜだか、ぎよつとしたわよ。

(あさ) (やわらかに) だって、他になんにも売ってなかったんだものねえ。いまの子供は、本当に可哀そうだよ。(語調を

かえて）あたらしい鱈のようですけど、鱈ちりになさいますか？

（伝兵衛） 酒は、まだあるか。

（あさ） （やはり障子の蔭から） ええ、まだ少しございますでしょう。

（伝兵衛） それじゃ晩は、鱈ちりで一ぱいという事にしようか。
（数枝） あたしも、そうしよう。

（伝兵衛） （抑制を忘れ、ついに大声を発する） 馬鹿野郎！ ど
こまでお前は、ふざけやがって、（立ち上りかけ、また腰を
おろして） 真人間になれ！

睦子、火のついたように泣き出し、数枝の懐ふところにしがみつく。
数枝は、冷然たり。

(伝兵衛) お前ひとりのために、お前ひとりのために、この家が、お前ひとりのために、どれだけ、(何か呟つぶやきながら、泣き出す)

数枝、睦子を抱いたまま静かに立って、奥の階段のほうへ行く。

(伝兵衛) (猛然と立ち上って) 待て！

(あさ) (台所から走り出て、伝兵衛を抑え) まあ、お父さん、何をなさる。

(伝兵衛) 殴らなくちやいけねえ。正気にかえるまで殴らなくちやいけねえ。

数枝、振り向きもせず、泣き叫ぶ睦子を抱いて、階段をのぼりはじめる。和服の裾すそから白いストッキングをはいているのが見える。

伝兵衛、あがく。あさ、必死にとどめる。

——幕。

第二幕

幕あくと、舞台はまっくら。ぱちと電燈がつく。二階の数枝の居間。数枝がいまその部屋の電燈をつけたのである。部屋には寢床が二つ。一つには、睦子が眠っている。数枝は寝巻のき姿で立っていて、片手で、たつたいま電燈のスイッチをひねったという形。片手を挙げてスイッチをつかんだまま、一点を凝視している。その一点とは、下手しもての雨戸である。雨戸が静かにあく。雪が吹き込む。つづいて二重廻しを着た男が、うしろむきになってはいって来る。

(数枝) (ひくく、けれども鋭く) どなた? どなたです。

(男) (雨戸をしめ、二重廻しを脱ぎ、はじめてこちら向きになつて、その場にきちんと坐る。村の人、金谷清蔵である) 私です。かんにんして下さい。(まじめに、ちよつと頭をさげる)

(数枝) (おどろき) まあ、清蔵さん。どうなさつたのです。

(素早く寝巻きの上に、羽織をひっかけ、羽織紐ひもを結びながら、部屋の炉のところに行き、坐つて) どろぼうかと思つたわ。いったい、どうしたの?

(清蔵) すみません。もういちど、私の気持を、ゆつくり聞いていただきたいと思つて、お宅の前をずいぶん永い間うろつ

いて、とうとう決心して、屋根へあがって、この二階のお部屋
 屋の雨戸に手をかけましたら、するするとあきましたので、
 それで、……。

(数枝) (苦笑し) とんだ鼠小僧ね。(火箸ひばしで埋うずみび火かを掻かき集め

ながら) でも、田舎では、こんな事は珍らしくないんですよ？
 田舎の、普通の、恋愛形式になつているのね、きつと。
 夜よ這ばいとかいう事なんじゃないの？

(清蔵) とんでもない、そんな、私は、決して、そんな、失礼
 な。

(数枝) (笑つて) いいえ、そうでなかったら、かえつて失礼み
 たいなものだわ。屋根へあがって、二階のこの部屋へ、しか

もこんな夜更よふけに人を訪問するなんて、正氣の沙汰じゃないわよ。

(清蔵) (いよいよ苦しげに) お願いです、からかわないで下さい。私が悪いのです。夜這いなどと言われるのは、実に心外ですが、しかし、致しかたがありません。私には、これより他に、手段が無かったです。(顔を挙げて) 数枝さん！

もうこれ以上、私を苦しめるのは、やめて下さい。イエスですか、ノオですか。それを、それだけを、今夜はつきり答えて下さい。

(数枝) (顔をしかめて) あら、あなたは、お酒を飲んでいるのね。

(清蔵) 飲みました。(沈鬱に) もう、この数日間、私は酒ば

かり飲んでいます。数枝さん、これも皆あなたが悪いのです。

あなたさえ帰って来なかつたら、ああ、つまらん、こんな事を言つたつて仕様がな。数枝さん、あなたは覚えています

か、忘れたでしょうね、あなたが、女学校を卒業して東京の

学校へいらつしやる時、あの頃はちょうど雪溶けの季節で路

がひどく悪くて、私があなただの行李(こつり)を背負つて、あなたのお

母さんと三人、浪岡の駅まで歩いて行きました。路傍(みちばた)には

もう露(ふき)の臺(とう)などが芽を出していました。あなたは歩きながら、

山辺(やまべ)も野辺(のべ)も春の霞(かすみ)、小川は囁(ささや)き、桃(つばみ)の蒼ゆるむ、という唱

歌をうたつて。

(数枝) ゆるむじやないわよ。桃の荅うるむ。潤うるむだったわ。

(清蔵) そうでしたか。やつぱり、あの頃の事を覚えていらつ

しやるのですね。それから、私たちは浪岡の駅に着いて、まだ時間がかかりあったので、私たちは駅の待合室のベンチに腰かけてお弁当をひらきました。その時、あなたのお弁当のおかずは卵焼きと金平牛蒡きんぴらごぼうで、私の持つて来たお弁当のおかずは、筋子すじこの粕漬かすづけと、玉葱たまねぎの煮たのでした。あなたは、私の粕漬の筋子を食べたいと言って、私に卵焼きと金平牛蒡をよこして、そうして私の筋子と玉葱の煮たのを、あなたが食べてしまいました。私もあなたの卵焼きと金平牛蒡を食べて、なんだかもうこれで、私たち二人の血がかよい合ったよ

うな気が致しました。いまここで別れても、決して別れきりになる事はないんだ、必ずまた私のところへ来て、きつと、夫婦、……ええ、そう思いましたのです。私はあの頃二十三、四になっていたでしようか。この村では、とにかく中等学校を出ているのは、私ひとりで、あなたと一緒にになれる資格のあるのは私だけだと、その前からぼんやり考えていた事でしたが、あのお弁当のおかずを取りかえて食べて、そうして、あなたのお母さんが、あなたに、清蔵さんのおかずは特別においしいようだね、と笑いながら言ったら、あなたは、だつて清蔵さんはよその人じゃないんだもの、ねえ清蔵さん、と私のほうを見て妙に笑いました。覚えて、おいでですか。

(数枝) (火箸で灰を掻き撫でながら、無造作に) 忘れちゃった

わ。

(清蔵) そうですか。(溜息をつけて) 何もかも私が馬鹿だっ

たのです。私はあの時、あなたにそう言われて、あまり嬉しくて、涙が出て、ごはんも喉のどにとおらなかつた程だったのです。これはきつと数枝さんも、東京の学校を卒業して帰って来たら、私と一緒になるつもりなのに違いない、そうして、あなたのお母さんも、だいたいその気で居られるのだとそう思い込んでしまったのです。

(数枝) そりゃ、お母さんは、そんな気でいらつしやつたのかも知れないわ。あなたの家と私の家とは昔から親しくしてい

るんだし、それにあなたは、お母さんのお気にいりだったし、だからあたしも、あなたを他人のようには思っていないかったんだけど、……でも、……。

(清蔵) (うなずき) そうでしょうとも、そうでしょうとも。私
が馬鹿な勘違いをしたのです。けれども、数枝さん、私はそ
れから待ちましたよ。もうきつと、あなたと一緒になれるも
のと錯覚してしまって、心の中では、あなたをワイフと呼ん
で待っていましたのに、あなたは、あれつきりもう帰って来
ない。この地方では男は二十三、四になると、たいていお嫁
をもらっているのです。私にもいろんな縁談がありました。が、
私は全部断りました。けれどもあなたは夏休みにも冬休みに

も一こう村へ帰つて来ないで、そのうちにあなたが、あなたの学校の先生で小説家でもある島田哲郎と結婚したという事を聞きました。まあ私の間の悪さはどんなだったか、察して下さい。私はそれから人が変わりました。うちの精米場の手伝いもあまりしなくなりました。煙草の味も覚ええました。酒を飲んで人に乱暴を働くようにもなりました。夜這いも、しました。

(数枝) (嘖き出して) 嘘、嘘。もうその辺からみんな嘘ね。男のひとつて、なぜそんな見え透いた嘘をつくんだらう。ご自分の嘘がご自分に気附いていないみたいに、大まじめでそんな嘘を言ってるのね。あたしが東京へ行つて、あなたの事を

忘れてしまっていたように、あなただつてそうなのよ。あたしと浪岡の駐車場で別れてそれからずっと十年間もあたしの事ばかり思っているなんて事は、出来るわけは無いじやありませんか。人間は皆、自分の毎日の生活に触れて来たものだけを考えて、それで一ぱいのものだわよ。自分の暮しに何の関係も無い、遠方にいる人の事なんか、たまあにはね、思い出す事もあるでしょうけど、いつのまにやら忘れてしまうもののだわ。あなたがそんなにお酒を飲んだり乱暴を働いたりするようになったのは、ちつともあたしのせいじや無いような気がするわ。あなたには昔から、そのような素質があつたなんて、そんな失礼な事はあたしは思っていないけれども、で

も、それはみんなあなたの生活の環境から自然にそうなつて行つただけの事じゃないの？ この村で、のらくらして居れば、きっとそうなるにきまつているわ。それだけの事なのよ。あたしのせいだなんて、ひどいわ。あたしがあなたを忘れていたように、あなただって、あたしを忘れていたのよ。そうしてこんどあたしが帰つて来たという事を聞いて、急に、気がかりになつて、何だかあたしを憎らしくなつて来たのに違くないわ。人間つて、そんなものだわ。

(清蔵) (急にふてぶてしく) 違うよ。その証拠には、私はいまでも独身です。いい加減に私を言いくるめようたつて駄目です。私はもう、三十四になります。この地方では、三十四に

もなつて、独身でいると、まるでもう変り物の扱いを受けま
す。どこか、かたわなのではないかなどと、ひどい噂うわさまで立
てられます。それでも、私はあなたを忘れられなかつた。あ
なたはもう、よそへお嫁に行つたのですし、あなたを忘れな
ければならぬと思つても、どうしてもそれは出来なかつたの
です。それには、理由があるのです。数枝さん、私は島田哲
郎の小説を読んだのです。あなたの御亭主は、どんな小説を
書いているのか、妙な好奇心から東京の本屋に注文して島田
哲郎の新刊書を四五種類取り寄せました。取り寄せなければ
よかつた。あれを読んで私はどんなにみじめに苦しんだか、
あなたには想像もつかないでしょう。島田さんの、いや、島

田の小説に出て来るさまざまの女は、何の事はない、みんなあなたです。あなたそっくりです。あのひとがあなたをどんなに可愛がっているか、また、あなたも、どんなにはり切つてあのひとに尽しているか、まざまざと私にはわかるのです。これでは私があなただを、忘れようたつて忘れられないじゃありませんか。あなたが私からいくら遠く離れていたつて、あの本を読めば、まるであなたたちが私の隣り部屋にでも寝起きしているように、なまなましく、やりきれない気がして来るのですもの。もう読むまいと思つても、それでも何か気がかりで、新聞などに島田の新刊書の広告などが出ていると、ついまた注文してしまつて、そうして読んで、悶^{もだ}えるのです。

実に私は不仕合せな男です。そう思いませんか。島田の小説の中にこんな俳句がありました。白足袋しろたびや主婦の一日始まりぬ。白足袋や主婦の一日始まりぬ。実際、ひとを馬鹿にしている。私はあの句を読んだ時には、あなたの甲斐かひ々々がしく、また、なまめかしい姿がありありと眼の前に浮んで来て、いても立つても居られない気持でした。何だかもう、あなたたちにはいいなぶりものにされているような気がして、仕様がありませんでした。これでは全く、酒を飲んでひとに乱暴を働きたくなるのも、もつともな事だと、そう思いませんか。いつともう誰か田舎女いなかおんなをめぐって、と考えた事もありましたが、白足袋や主婦の一日始まりぬ、そのあなたの美しいまぼ

ろしが、いつも眼さきにちらついていたながら、田舎女の、のろくさいおかみさん振りを眺めて暮すのは、あんまりみじめです。私もみじめですし、また、そんな事は何も知らずにどたばた立ち働いているその田舎女にも気の毒です。数枝さん、私はあなたのためにもう一生、妻をめとられない男になりました。島田の出征の事は、私は少しも知りませんでした。島田の小説がこの数年来ちつとも発表されなくなったのも、この大戦で、小説家たちも軍需工場か何かに進出して行かざるを得なくなつたからだろうくらいに考えていました。しかし、新作の小説が出なくても、私の手許には、てもと以前の島田の本が何冊も残っています。あまりのろわしくて、焼いてしまおう

かと思った事もありましたが、何だかそれは、あなたのからだを焼くような気がして、とても私には出来ませんでした。

あの島田の本を、憎んでいながら、それでも、その本の中のあなたが慕わしくて、私は自分の手許から離す事が出来なかったのです。この十年間、あなたはいつも私の傍にいたのです。白足袋や主婦の一日始まりぬ。あなたのその綺麗な姿が、朝から晩まで、私の身のまわりにちらちら動いて、はたらいているのです。忘れようたつて、とても駄目です。そこへ突然、あなたが帰って来られた。聞けば島田は、もうずっと前に出征して、そうしてどうやら戦死したらしいという事で、私は、……。

(数枝) それからあとと言えないでしょうね。あなたはもう、

あたしが帰って来てから、二、三箇月間は朝から晩までこの家にいりびたりで、あたしのお父さんもお母さんもあんな気の弱い人たちばかりだから、あなたに来るなとも言えないで、ずいぶん困っているようだったから、あたしがあなたのお家へ行って、(言いながら、ふと畳の上に落ち散らばっている線香花火に目をとどめ、一本ひろってそれに火をつける。線香花火がパチパチ燃える。その火花を見つめながら)あなたのお母さんと、あなたの妹さんと、それからあなたと三人のいらっしやる前で、あんなにしょっちゅうおいでになつては、ひとからへんな噂を立てられるにきまつているから、もうお

いでにならないようにと申し上げて、それからぱったりあなたもおいでにならなくなつて、（花火消える。別な一本を拾つて、点火する）ほつとしていたら、こないだ突然あんな、いやらしい手紙を寄こして、本当に、あなたも変つたわね。村でもあなたは、ひどく評判が悪いようじゃないの。

（清蔵）

いやらしくても何でも仕方ありません。私はあの手

紙は、泣きながら書きました。男一匹、泣きながら書きました。きょうは、あの手紙の返事を聞きに来ました。イエスですか、ノオですか。それだけを聞かして下さい。きぎなようですけれども、（ふところから、手拭いに包んだ出刃庖丁でばぼうちようを出し、畳の上に置いて、薄笑いして）今夜は、こういうも

のを持って来ました。そんな花火なんかやめて、イエスカノ
才か、言つて下さい。

(数枝) (花火が消えると、また別の花火を拾つて点火する。以
後も同様にして、五、六本ちかく続ける) この花火はね、二、
三日前にあたしのお母さんが、睦子に買つて下さったものな
んですけど、あんな子供でも、ストーヴの傍でパチパチ燃え
る花火には、ちつとも興味が無いらしいのよ。つまらなそう
に見ていたわ。やつぱり花火というものは、夏の夜にみんな
浴衣ゆかたを着て庭の涼すずみだい台たいに集つて、西瓜すいかなんかを食べながら
パチパチやったら一ばん綺麗に見えるものなのでしょうね。
でも、そんな時代は、もう、永遠に、(思わず溜息をつく)

永遠に、来ないのかも知れないわ。冬の花火、冬の花火。ばからしくて間まが抜けて、（片手にパチパチいう花火を持ったまま、もう一方の手で涙を拭く）清蔵さん、あなたもあたしも、いいえ、日本の人全部が、こんな、冬の花火みたいなものだけだわ。

（清蔵）（気抜けした態度）それは、どんな意味です。

（数枝）意味も何もありませんわ。見ればわかるじゃないの。日本は、もう、（突然、花火をやめて、袖そでで顔を覆う）何もかも、だめなのだけわ。（袖から顔を半分出し、嗚咽おえつしながら少し笑い）そうして、あたしも、もうだめなのだけわ。どんなにあがいて努めても、だめになるだけなのだけわ。

(清蔵) (何か勘違いしたらしく、もぞりと一膝ひざすすめて) そう、
そうです。このままでは、だめです。思い切つて生活をかえ
る事です。睦子さんひとりくらいは立派に私が引受けて見せ
ます。私の家はご承知のようにこのへんでたった一軒の精米
屋ですから、米のほうは、どんなにしたつてやりくりがつく
のです。いまは精米屋が一ばんです。地主よりも誰よりも米
の自由がきくのです。

(数枝) (全然それを聞いていない様子で、膝の上で袖の端をい
じりながら) いつから日本の人が、こんなにあさましくて、
嘘つきになつたのでしょうか。みんなにせものばかりで、知つ
たかぶつてごまかして、わずかの学問だか主義だかみたくないな

ものにこだわってぎくしゃくして、人を救うもないもんだ。人を救うなんて、まあ、そんなだいそれた、（第一幕に於けるが如き低い異様な笑声を発する）ずうずう 図々しいにもほどがあるわ。日本の人が皆こんなあやつり人形みたいなへんてこな歩きかたをするようになったのは、いつ頃からの事かしら。ずっと前からだわ。たぶん、ずっとずっと前からだわ。

（清蔵）（たじろぎながら）それは、本当に、都会の人はそうでしょう。まったく、そうでしょう。しかし、田舎者の純情は、昔も今も同じです。数枝さん、（へんに笑い、また少し膝をすすめる）昔の事を思い出して下さい。私とあなたは、もうとうの昔から結ばれていたのです。どうしても一緒になるべ

き間柄だったので。数枝さん、思い出して下さい。さすがに私もいままで、この事だけは恥かしくて言いかねていたのですが、数枝さん、私たちは小さい時に、あなたの家の藁わら小屋ごやの藁わらにもぐって遊んだ事がありました。あの時の事を、よもや忘れてはいないでしょう？ あなたは、女学校へはいるようになったら、もう、私とあんな事があつたのをすっかり忘れてしまったような顔をしていましたが、あなたは、あの時から、私のところにお嫁に来なければならなくなっていたのです。私も童貞を失い、あなたも処女を。

(数枝) (驚愕きょうがくして立ち上り) まあ、あなたは何という事をおっしゃるのです。まるでそれではごろつきです。何の純情

なものですか。あなたのような人こそ、悪人というのです。帰って下さい。お帰りにならないければ、人を呼びます。

(清蔵) (すっかり悪党らしく落ちつき) 静かにしなさい。(出刃庖丁をちよつと持ち上げて見せて、軽く畳の上に投げ出し) これが見えませんか。今夜は、私も命がけです。いつまでも、そうそうあなたにからかわれていたくありません。イエスですか、ノオですか。

(数枝) よして下さい、いやらしい。女が、そんな、子供の頃 のささいな事で一生ひとから攻められなければならぬのでしたら、女は、あんまり、みじめです。ああ、あたしはあなたを殺してやりたい。(清蔵のほうを向きながら二、三歩あ

とずさりして、突然、うしろ手で背後の襖ふすまをあける。襖の外は階段の上り口。そこに、あさが立っている。数枝、そこにあさが立っているのを先刻より承知の如く、やはり清蔵のほうを見ながら）お母さん！ たのむわ。この男を、帰らせてよ。毛虫みたいな男だわ。あたしはもう、口をきくのもいや。殺してやりたい。

（清蔵）（あさの立っているのを見て驚き）やあ、お母さん、あなたはそのにいたのですか。（急にはにかみ、畳の上の出刃庖丁をそそくさと懐ふところにしまいこみ）失礼しました。帰りましょう。（立ち上り、二重廻しを着る）

（あさ）（おどおど部屋にはいり、清蔵の傍に寄り、清蔵が二重

廻しを着るのにちよつと手伝い、おだやかに）清蔵さん、早くお嫁をもらいなさい。数枝には、もう、……。

（数枝）（小声で鋭く）お母さん！（言うなと眼つきで制する）

（清蔵）（はつと気附いた様子で）そうですか。数枝さん、あなたもひどい女だ。（にやりと笑つて）

（にやりと笑つて）^{すじ}凄腕だ。おそれいりましたよ。私が毛虫なら、あなたは蛇だ。

^{へび}淫乱だ。女郎だ。みんなに言つてやる。ようし、みんなに言つてやる。（身を

ひるがえして、背後の雨戸をあける。どつと雪が吹き込む）

（あさ）（低く、きつぱりと）清蔵さん、お待ちなさい。（清蔵

に抱きつくようにして、清蔵のふところをさぐり、出刃庖丁

を取り出し、逆手に持つて清蔵の胸を刺さんとする）

(清蔵) (間一髪にその手をとらえ) 何をなさる。気が狂ったか、

糞くそばあ 婆ばあめ。(庖丁を取り上げ、あさを蹴けた倒し、外にのがれ

出る。どさんと屋根から下へ飛び降りる音が聞える)

(数枝) (あさに武者振りついて) お母さん! つらいわよう。

(子供のように泣く)

(あさ) (数枝を抱きかかえ) 聞いていました。立聞きして悪い

と思ったけど、お前の身が案じられて、それで、……(泣く)

(数枝) 知っていたわよう。お母さんは、あの襖の蔭で泣いて

いらした。あたしには、すぐにわかった。だけどお母さん、

あたしの事はもう、ほつといて。あたしはもう、だめなのよ。

だめになるだけなのよ。一生、どうしたって、幸福が来ない

のよ。お母さん、あたしを東京で待っているひとは、あたしよりも年がずっと下のひとだわ。

(あさ) (おどろく様子) まあ、お前は。(数枝をひしと抱きかかえ) 仕合せになれない子だよ。

(数枝) (いよいよ泣き) 仕様が無いわ。仕様が無いわ。あたしと睦子が生きて行くためには、そうしなければいけなかったのよ。あたしが、わるいんじゃないわよ。あたしが、わるいんじゃないわよ。

雪が間断なく吹き込む。その辺の畳も、二人の髪、肩なども白くなつて行く。

—幕。

第三幕

舞台は、伝兵衛宅の奥の間。正面は堂々たる床の間だが、屏ようぶ風が立てられているので、なかば以上かくされている。屏風はひどく古い鼠ねずみいろ色になつた銀屏風。しかし、破れてはいない。上手かみては障子。その障子の外は、廊下の気持。廊下のガラス戸から朝日がさし込み、障子をあかるくしている。下し手もては襖ふすま。

幕あくと、部屋の中央にあさの病床。あさは、障子のほうを

頭にして仰向に寝ている。かなりの衰弱。眠っている。枕まくら
もと元にはくすりびん薬瓶、すいの薬袋、吸呑み、その他。病床の手前には
きり桐の火鉢が二つ。ひぼち両方の火鉢にそれぞれ鉄瓶がかけられ、湯
 気が立っている。数枝、障子に向つた小机の前に坐つて、何
 か手紙らしいものを書いてある。

第二幕より、十日ほど経過。

数枝、万年筆を置いて、机にほおづえ頬杖をつき障子をぼんやり眺
 め、やがて声を立てずに泣く。

間。

あさ、眠りながら苦しげに呻く。^{うめ}呻きが、つづく。

(数枝) (あさのほうを見て、机上の書きかけの手紙を畳んでふところにいれ、それから、立つてあさのほうへ行き、あさをゆり起し) お母さん、お母さん。

(あさ) ああ、(と眼ざめて深い溜息^{ためいき}をつく) ああ、お前かい。

(数枝) どこか、お苦しい？

(あさ) いいえ、(溜息) 何だかいやな、おそろしい夢を見て、
…… (語調をかえて) 睦子は？

(数枝) けさ早く、おじいちゃんに連れられて弘前^{ひろさき}へまいり

ました。

(あさ) 弘前へ？ 何しに？

(数枝) あら、ご存じ無かったの？ きのう来ていただいたお

医者さんは、弘前の鳴海内科の院長さんよ。それでね、お父さんがきよう、鳴海先生のところへお薬をもらいに行ったの。

(あさ) 睦子がいないと、淋しい。

(数枝) 静かでかえつていいじゃないの。でも、子供つてずいぶん現金なものねえ。おばあちゃんが御病気になったら、もうちつともおばあちゃんの傍には寄りつかず、こんどはやたらにおじいちゃんにばかり甘えて、へばりついているのだもの。

(あさ) そうじゃないよ。それはね、おじいちゃんが一生懸命に睦子のご機嫌きげんをとつたから、そうだったのさ。おじいちゃんにして見れば、ここは何としても睦子を傍に引寄せていたところだろうからね。

(数枝) あら、どうして? (火鉢に炭をついだり、鉄瓶に水をさしたり、あさの掛蒲団かけぶとんを直してやつたり、いろいろしながら気軽い口調で話相手になつてやっている)

(あさ) だって、あたしがいなくなった後でも、睦子がおじいちゃんになつて居れば、お前だって、東京へ帰りにくくなるだろうからねえ。

(数枝) (笑つて) まあ、へんな事を言うわ。よしませう、ば

からしい。林檎りんごでもむきましようか。お医者さんはね、何でも食べさせれば、よくなるとおっしゃっていたわよ。

(あさ) (幽かすかに首を振り) 食べたくない。なんにもいただきたくない。きのう来たお医者さんは、あたしの病気を、なんと言っていたの？

(数枝) (すこし 躊躇ちゆうちよして、それから、はつきりと) 胆囊たんのう

炎えん、かも知れないって。この病気は、お母さんのように何を食べてもすぐ吐くのでからだが衰弱してしまって、それで危険な事があるけれども、でも、いまに食べものがおなかにおさまるようになったら、一週間くらいでよくなるって言っていました。

(あさ) (薄笑いして) そうだといいがねえ。あたしは、もうだめなような気がするよ。その他にも何か病気があるんだろう？ 手足がまるで動かない。

(数枝) そりやお医者に見せたら、達者な人でも、いろんな事を言われるんだもの、それをいちいち気にしていたら、きりが無いわ。

(あさ) なんと云ったのだい。

(数枝) いいえ、何でも無いのよ。ただね、軽い脳溢血のういつけつの気味があるようだとか、それから、脈がどうだとか、こうだとか、何だかいろいろ言っていたけど忘れちゃったわ。(おどけた口調で) 要するにね、食べたいものを何でも、たくさん

召上つたらなおるのよ。数枝という女博士の診断なら、そう
だわ。

(あさ) (厳肅に) 数枝、あたしはもう、なおりたくない。こう
してお前に看病してもらいながら早く死にたい。あたしには、
それが一ばん仕合せなのです。

茶の間の時計が、ゆっくり十時を打つのが聞える。

(数枝) (あさの言う事に全く取り合わず、聞えぬ振りして) あ
ら、もう十時よ。(立上り) 葛湯くずゆでもこしらえて来ましょう。
本当に、何か召し上らないと。(言いながら上手の障子をあ

（あさ） おお、きようは珍らしくいいお天気。

（あさ） 数枝、ここにいてくれ。何を食べても、すぐ吐きそうになって、かえって苦しむばかりだから。どこへも行かないで、あたしの傍にいてくれ。お前に、すこし言いたい事がある。

（数枝） （障子を静かにしめて、また病床の傍に坐り、あかるく）
どうしたの？ ね、お母さん。

（あさ） 数枝、お前はもう、東京へは帰らないだろうね。

（数枝） （あつきり） 帰るつもりだわ。お父さんはあたしに、出て行けと言ったじゃないの。そうして、あの日からもう、あたしにはろくに口もききやしないんだもの。帰るより他は無

いじやないの。

(あさ) あたしがこんなに寝たきりになつてもかい。

(数枝) お母さんの病気なんか、すぐなおるわよ。そりや、なおるまでは、やっぱりあたし、お父さんがどんなに出て行けつて言つたつて、この家に頑張がんばつてお母さんの看病をさせていただくつもりだけど。

(あさ) 何年でもかい。

(数枝) 何年でもつて、(笑つて)お母さん、すぐなおるわよ。
(あさ) (首を振り)だめ、だめ。あたしには、わかつています。

数枝、あたしにもしもの事があつたら、お前は、お父さんひとりをおこの家に残して東京へ行くのですか。

(数枝) もう、いや。そんな話。(顔をそむけて泣く) もしも、そうなつたら、もしも、そうなつたら、数枝も死んでしまうから。

(あさ) (溜息をついて) あたしはお前を、世界で一ばん仕合せな子にしたかったのだけど、逆になってしまった。

(数枝) いいえ、あたしだけが不仕合せなんじゃないわ。いま日本で、ひとりでも、仕合せな人なんかあるかしら。あたしはね、お母さん、さつきこんな手紙を書いてみたのよ。(ふところから先刻書きかけの手紙を取り出し、小さくはしやいで) ちよつと読んでみるわね。(小声で読む) 拝啓。為替三かわせ百円たしかにいただきました。こちらへ来てから、お金の使

い道がちつとも無くて、あなたからこれまで送っていたいた
たお金は、まだそつくりごぎいます。あなたのほうこそ、い
くらでもお金が要いるのでございましょうに、もうこれからは、
お金をこちらへ送つて寄こしてはいけません。そうして、も
しそちらでお金が急に要いるような事があつたら、電報でお知
らせ下さいまし。こちらでは、本当になんにも要いらないので
すから、いくらでもすぐにお送り申します。それまで、おあ
ずかり致して置きましょう。さて、相変らずお仕事におはげ
みの御様子、ことしの展覧会は、もうすぐはじまるとか、お
正月がすぎたばかりなのに、ずいぶん早いのね。展覧会にお
出しになる絵も、それでは、もうそろそろ出来上った頃と思

います。新しい現実を描かなければならぬと、こないだのお手紙でおっしゃって居られました。何をおかきになったの？ 上野駅前の浮浪者の群ですか？ あたしならば、広島の焼跡をかくんだがなあ。そうでなければ、東京の私たちの頭上に降って来たあの美しい焰ほのおの雨。きつと、いい絵が出来るわよ。私のところでは、母が十日ほど前に、或あるいやな事件のショックのために卒倒して、それからずっと寝込んで、あたしが看病してあげていますが、久し振りであたしは、何だか張り合いを感じています。あたしはこの母を、あたしの命よりも愛しています。そうして母も、それと同じくらいあたしを愛しているのです。あたしの母は、立派な母です。そ

うして、それから、美しい母です。あたしがあの、ほとんど日本国中が空襲を受けているまつさいちゆうに、あなたたちのとめるのも振り切つて、睦子を連れてまるで乞食こじきみたいな半狂乱の恰好かつこうで青森行きあおもりの汽車に乗り、途中何度も何度も空襲に遭あつて、いろいろな駅でおろされて野宿し、しまいは食べるものが無くなつて、睦子と二人で抱き合つて泣いていたら、或る女学生がおにぎりおにぎりと、きざみ昆布こんぶと、それから固パンをくれて、睦子はうれしさのあまり逆上したのか、そのおにぎりを女学生に向つて怒つて投げつけたりなどして、まあ、あさましい、みじめな乞食の親子になりさがり、それでもこの東北のはての生れた家へ帰りたくてならなかつたの

は、いま考えてみると、たしかにあたしは死ぬる前にいまいちどあたしの美しい母に逢いたい一念からだつたのでした。あたしの母は、いい母です。こんどの母の病気も、もとはと
言えば、あたしから起つたようなものなのです。あたしは、いまはこの母を少しでも仕合せにしてあげたい。その他の事は、いつさい考えない事にしました。母があたしにいつまでも、母の傍にいなさい、と言つたら、あたしは一生もう母の傍にいるつもりです。あなたのところへも帰らないつもりです。父は、世間に対する気がねやら、また母に対する義理やらで、早くあたしに東京へ帰れ、と言つていますが、しかし、母が病気で寝込んでしまったら、この父も、めつきり気弱く、

我が折れて来たようです。あたしは、もう東京へ帰らないかも知れません。もし、あなたのほうで、あたしをこいしく思つて下さるなら、絵をかくのをおやめになつて、この田舎へ来て、あたしと一緒に老百姓になつて下さい。出来ないでしょうね。でも、そんな氣になつた時には、きつとおいで下さいまし。いまにあなたかくなり、雪が溶けて、田圃たんぼの青草が見えて来るようになったら、あたしは毎日鋤くわをかついで田畑に出て、黙つて働くつもりです。あたしは、ただの百姓女になります。あたしだけでなく、睦子をも、百姓女にしてしまふつもりです。あたしは今の日本の、政治家にも思想家にも芸術家にも誰にもたよる氣が致しません。いまは誰でも自分

たちの一日一日の暮しの事で一ぱいなのでしよう？ そんならそうと正直に言えばいいのに、まあ、厚かましく国民を指導するのなんのと言つて、明るく生きよだの、希望を持ただの、なんの意味も無いからまわりのお説教ばかり並べて、そうしてそれが文化だつてさ。呆れるあきじゃないの。文化つてどんな事なの？ 文ぶんのお化ばけと書いてあるわね。どうして日本のひとたちは、こんなに誰もかれも指導者になるのが好きなのでしよう。大戦中もへんな指導者ばかり多くて閉口だったけれど、こんどはまた日本再建とやらの指導者のインフレーションのようですね。おそろしい事だわ。日本はこれからきつと、もつともつと駄目になると思うわ。若い人たちは勉強

しなければいけないし、あたしたちは働かなければいけないのは、それは当りまえの事なのに、それを避けるために、いろいろと、もつともらしい理窟りくつがつくのね。そうしてだんだん落ちるところまで落ちて行ってしまふのだわ。ねえ、アナキーってどんな事なの？ あたしは、それは、支那しなの桃源境みたいなものを作ってみる事じゃないかと思うの。気の合った友だちばかりで田畑を耕して、桃や梨なしや林檎りんごの木を植えて、ラジオも聞かず、新聞も読まず、手紙も来ないし、選挙も無いし、演説も無いし、みんなが自分の過去の罪を自覚して気が弱くて、それこそ、おのれを愛するが如く隣人を愛して、そうして疲れたら眠って、そんな部落を作れないものか

しら。あたしはいまこそ、そんな部落が作れるような気がするわ。まずまあ、あたしがお百姓になつて、自身でためしてみますからね。雪が消えたら、すぐあたしは、田圃に出て、（読むのをやめて、手紙を膝ひざの上に置き、こわばった微笑を浮べて母のほうを見て）ここまで書いたのだけど、もうあたしは、この手紙が最後に鈴木さんとは、おわかれになるかも知れないわ。

（あさ）　鈴木さんというの？

（数枝）　ええ、ずいぶんあたしたち、お世話になつたわ。この方のおかげで、あたしと睦子は、あの戦争中もどうやら生きて行けたのだわ。でも、お母さん、あたしはもう、みんな忘

れる。これからは一生、お母さんの傍にいるわ。考えてみると、お母さんだつて、栄一が帰つて来ないし、（言つてしまつてから、どぎまぎして）でも、栄一は大丈夫よ。いまに、きつと元気で帰つて来ると思うけど。

（あさ） お前と睦子が、この家に来てくれたら、栄一は帰つて来なくても、かまいません。あの子の事は、もうあきらめているのです。数枝、あたしは栄一よりも、お前と睦子がぶびんでならない。（泣く）

（数枝）（ハンケチであさの涙を拭いてやつて）あたしは、あたしなんか、どうなつたつていいのよ。本当にいつもそう思つているのよ。（うつむいて）悪い事ばかりして来たのだもの。

(あさ) 数枝、(変った声で) 女には皆、秘密がある。お前は、それを隠さなかつただけだよ。

(数枝) (不思議そうにあさの顔を覗のぞき込み) お母さん、いやだわ、そんな真面目まじめな顔して。(はにかむような微笑)

(あさ) (それに構わず) あれから何日になりますか。

(数枝) いつから？

(あさ) あの夜から。

(数枝) さあ、もう十日くらい経つかしら。よしませう、あの晩の話は。

(あさ) 十日？ そうかねえ。たった十日。あたしには、半年も前のような気がする。

(数枝) だってお母さんは、あの晩にあれから階段の下で卒倒して、それつきり三日も意識不明でいたんだもの、あの晩の事はもうずっと遠い夢のような気がするのは無理もないわ。夢だわよ。あたしは、あれも忘れる事にしよう。何もかも忘れる事にしよう。あたしはお百姓になって、そうしてあたしたちの桃源境を作るんだ。

(あさ) 清蔵さんは、その後どうしているか、何か聞かなかつたかい。

(数枝) 知らないわ、あんなひとの事。もうあたしは忘れてしまふのだから、いいのよ。お酒をよして、このごろ人が変つたみたいになつたとか、きのうあのひとの妹さん

が来て言つてたけど、でも、あてになりやしないわ。

(あさ) 早く、お嫁をもらえばいいのね。

(数枝) 何かいまそんな話もあるんですつて。妹さんが言つてたわ。こんどの縁談は、どうした事か、兄さんがとても乗氣だつて。あたしには、わかるわ。

(あさ) 何が、わかるの？

(数枝) 何がつて、清蔵さんの気持が。

(あさ) どうして？

(数枝) どうしてつて、だつて、お母さんにあの晩あんなに迄^{まで}されて、それでも改心しないなら、あのひとは馬鹿か悪魔だわ。

(あさ) その馬鹿か悪魔は、あたしだよ。あたしなのだよ。あたしは、あの晩、あの人を本当に殺そうとしたのだ。

(数枝) もういや、よしましろう、お母さん。あたしのために、みんなあたしのために、お母さん、ごめんなさいね、これからあたしは、(泣き出して) 親孝行して、御恩をかえすのだから、もうなんにも言わないで。日本にはもう世界に誇るものがなんにも無くなったけれど、でも、あたしのお母さんは、あたしのお母さんだけは。

(あさ) ちがいます。あたしは、お前よりずっとずっと悪い女です。あたしは、あの晩、あのひとを殺そうとしたのは、お前のためではなかったのです。あたしのためです。数枝、あ

たしをこのまま死なせておくれ。死ぬのが一ばん仕合せなのです。数枝、あのひとは、六年前、ちようどあのようにして、このあたしを、……。

(数枝) (顔を挙げ、蒼あおざめる)

(あさ) あたしは、馬鹿で、だまされました。女は、女は、どうしてこんなに、……。 (泣く)

(数枝) (苦痛に堪えざるものの如く、荒い呼吸をして、やがて立ち上る。膝から手紙が舞い落ちる。それに眼をとどめて)

桃源境、ユートピア、お百姓、(第一幕に於けるが如き低い異様の笑声を発する) ばかばかしい。みんな、ばかばかしい。これが日本の現実なのだわ。(高くあははと笑う) さあ、日

本の指導者たち、あたしたちを救って下さい。出来ますか、出来ますか。（と言いながら、手紙を拾い、二つに裂く、四つに裂く、八つに裂く、こまごまに裂き）えい、勝手になさいだ。あたし、東京の好きな男のところへ行くんだ。落ちるところまで、落ちて行くんだ。理想もへちまもあるもんか。

玄関を乱暴にあける音聞える。

「電報です。島田数枝さん。電報です。」という配達人の声。

（数枝） あら、あたしに電報。いやだ、いやだ。ろくな事じゃ

ない。いまの日本の誰にだって、いい知らせなんかありっこ

ないんだ。悪い知らせにきまっている。(うろついて、手にしているたくさんかえんの紙片を、ぱつと火鉢に投げ込む。火焰あがる) ああ、これも花火。(狂ったように笑う) 冬の花火さ。あたしのあこがれの桃源境も、いじらしいような決心も、みんなばかばかしい冬の花火だ。

玄関にて、「電報ですよ。どなたか、居りませんか。島田数枝さん。至急報ですよ。」という声つづくうちに、

——幕。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集8」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年4月25日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月か、1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2005年1月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

冬の花火

———三幕

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 太宰治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>